

「どうして自動販売機があるのかな？」(単一校版)

-教師用ガイドブック-

・交流版との違いは単に相手校がないだけでなく、教師の資質が問われますので次のことに留意するといいいでしょう。子どもたちに気づいて欲しい課題や考えを深めたり対比したりする活動を盛り込む場合に、交流あり学習版では、相手校にきっかけや働きかけを依頼してアクションを起こすことができました。しかし、交流相手校がない場合は、クラスの中での話し合いや課題の設定によりコントロールを学習者に気づかれないようにしないと意味がありません。ワークシートサンプルにあるような子どもたちの今までの認識を揺るがせるような資料を用意して、子どもたちに暗示的な課題をあたえつつ気づきを誘発していくとよいでしょう。

・T・Tなど学習支援システムを考える必要があります。この場合は、ネットワークを通して支援を行ってもらおうようにすると直接的な指示ということがうすれるので学習者に自主的な学習を促せるでしょう。

総活動時間: 12 時間

対象学年: 小6年生

●はじめに

・この単元では、自動販売機を単に調べるだけでなく、この調べ学習の経過で子どもたちが社会的な問題に気づき(環境問題、社会の変容、モラルの問題など)自らの態度変容までもっていけるかがポイントになります。ですから、子どもたちの気づきやモラルに対する押しつけがましい指導は避けるべきです。

・クリーン作戦のような体験活動や調べ活動を通して、学習を進めていく中でゴミ問題や電力問題などに気づくようにしましょう。でも、教師の側から無理に気づくように持っていくより、気づかなければそれでいいぐらいの気持ちで取り組んで下さい。

・カリキュラム実施の時間的制約や各班(各自)の資料作成時間の差などを考えると活動場面の設定や時間設定をフレキシブルにすることが大切です。また、すべて整ってからの発表会より中間発表的なものが大切です。班ごとに「発表会」の形式を取り、意見の発信と交流をすることによって、他から評価されることを体験させること、子どもたちがこの活動によって気づいたことを自分で修正していく体験をすることこそが大切だからです。

・本単元の目的は、自動販売機を取り巻く環境全体について、各自が調査したこと、知り得たこと

について自分の意見や考え、主張を持つことにあります。各班（各自）がまとめたことを全員一律に理解する必要はないので、無理に知識理解に走らないよう、効果を短絡的に求めないようにしましょう。

- ・調べ活動での資料作成は、むしろ、ステップ3や4、5での話し合いの時点で、自分の意見に説得力を持たせるための資料としての活用、またそのためのヒントとなるようなものを期待していけばいいでしょう。これによって自分の意見を考えるプロセスを学ぶ体験をさせていきます。

- ・また校内の研修体制や人的なネットワークに気をくばり、協力しながら実践を進めましょう。何をめざして何をしているのか伝えることが大切と考えます。

ステップ1 空き缶ポイ捨てと自動販売機について考えよう

- 学校周辺などを歩き、空き缶・ビン・ペットボトルなどを収集することで空き缶ポイ捨てに対する問題意識を持つ。

- ・このときの教師は、「ゴミが悪いとか捨てる人間はどんな人間なんだ。」と子どもたちに問題意識を持たせることが大切で、決して「缶を捨てちゃいけない。」「君らもしてしてるんとちがう？」等の教師根性は極力抑えるようにしましょう。

- ・「川や道路に空き缶があるのはなぜ（観光客、キャンプ、地域の人、運転手）？」だろうと自分たちの生活に目を向けるようにしましょう。活動の中で「どうして私たちはこんなことをしなくてはならないのか。」という思い、つまり学校でやらされているという方向に向けては逆効果なのでそんな意識をもたせてしまうとやらないほうがましになります。

- ・自販機そのものではなく、「使用者のモラル」の面が非常に大きいことに気づかせたいものです。ただし、口だけで「モラルモラル」と言ってもなかなか動かないのが現状であり、具体的な動きとして「設置場所の工夫」や「自分たちの工夫に」に目を向けさせるようにしたいものです。

- ・基本的な立場としては短絡的に「自動販売機設置＝空き缶ポイ捨て」という考え方ではなく、「自動販売機＝文明の利器・技術の結晶」というように考えさせたいものです。ただし、現在の自動販売機はまだ完璧なものでなく、空き缶回収システムを組み込むことなどがこれから求められていくであろうこのことをステップ5「未来の自販機を考えよう」につなげておきましょう。

ステップ2 自動販売機についてもっとよく知ろう

- 自動販売機やポイ捨ての実態を調査について、もっとくわしく調べる計画を立てる。

- ・ホームページなどにまとめて発信することと発信する目的を意識させながら、計画を練らせることが大切です。発信の目的を最初の段階で明らかにしてあげましょう（「世界の人々にアピールする」など少しオーバーな表現でもかまいません。意欲を高めましょう）。

- 名称:計画にしたがって、各自で方法を選びながら、調べ活動を行う。

- ・設置している店の人や、自販機を利用している人にインタビューする。
- ・自販機製造会社に取材したデジタル教材のホームページ（www.mpec.tsu.mie.jp）で調べたり、電子メールや郵便で質問したりする。
- ・班の構成は、テーマ別に決めるのを優先し人数の配分や教師の都合によって決定しない方がよいでしょう。班の構成をも固定的なものより、途中での変更等ができるように柔軟に対応することで意見や考えの交流が生まれます。ものを調べさせる最初の段階からどこにどのような内容で発信するのかといった相手意識を持たせることも重要です。この時メールに応じてくれるメールボランティア的な方を探しておくことも大事なこともかもしれません。

<調べるための視点>：自販機の置かれている場所、空き缶の捨てられているところ、町内の自動販売機の数や種類

- ・取材するための場所につれて行くだけで、視点は子どもに試行錯誤させるようにしましょう。視点を教えてしまうと次の学習に転移が期待できません。じっくり待つ時期も必要です。教師は子どもたちのために活動の時間を絞り出す役目であると認識しましょう。この時期にどれだけ活動したかが問題意識の深さとなって現れると考えてもいいでしょう。

ステップ3 調べて考えたことをわかりやすくまとめよう

○名称:調べてわかったことや自動販売機やポイ捨てに対する自分の考えが、友達や他の地域の人に伝わるように工夫してまとめる段階です。

・調べた結果などの評価を教師が行わず、送った結果相手側から指摘されて自分たちの手で工夫したことを修正していけるように計画したいものです。なぜ伝わらなかったのかこちらも相手に理由を伝えることで自分たちの内容も工夫していくことができるようになります。教師が手取り足取り教えていくのではなくお互いのやりとりによって気づいていくことが大切です。

・そのためにまとめている途中で中間発表を行うといいでしょう。この中間発表で自分の気づいていない視点到気づかされたり、相手に伝わっているつもりでも伝わっていないところを発見したりと自分のまとめを吟味することができます。

・深い考えを持つ班や問題を浅くしかとらえていない班もあります。他の班がどのような考えも持っているのか、クラスの中での意見交流も必要でしょう。外への発信と返事は、クラスへ返すことのできる時間の保証と教室の壁などを利用した情報交換ボードの活用などと平行して考えてみて下さい。また、ここで班の構成員をシャッフルすると情報の交換が自然におこるので作業班を組み替えるのも1つの方法でしょう。

ステップ4 調べているうちにでてきた課題について自分たちにできることを話し合おう。（例えば、

空き缶ポイ捨てを減らす方法など)

- ・子どもたちの持っている疑問や進めていきたい学習の方向性を常に意識し、コントロールを子ども側に見せないように、学習を支援する立場で進めて下さい。外からのメールなどの働きかけをたのんでもよいでしょう。
- ・第三者的な発想で終わるのではなく、できるだけ身近なことから行動化できるように自分たちの生活を振り返らせ、自分が始められることに目を向けさせていくようにすることが大切です。

ステップ5 未来の町での自動販売機を考えよう。

このテーマを元に自分たちの夢の自販機を提案する段階です。

- ・すぐにでも実現可能なものから近未来で実現できそうなもの、または全く空想上のものまで、自由な発想を重視して提案することが大切です。このとき学習した体験を活かしたアイデアを持っている子がいたらみんなの前で取り上げ賞賛しましょう。
- ・必ずしも単元の学習時間内に終える必要はありません、「年度中は、アイデアを受け付けるよ。」ぐらいの姿勢で余裕をもって取り組みましょう。
- ・個人のアイデアは全体に知らせたり、HPなどを使って発信することにしましょう。
- ・また、自販機製造会社に自分たちのアイデアを提案していくことも学習の発展として考えておきましょう。